

高齢者大学文芸部 8月歌会

バスの時刻はや過ぎたれどまだ来ぬに客を乗せざる回送車ゆく 岡本 トシ  
穏やかに過ぎし一日の夕厨魚焼く傍え茗荷を刻む 梅野かをり  
長雨に畑の胡瓜も根上りて伸びし蔓先小さき実をさぐ 佐々木佐江子  
夜の静寂なにを告ぐるや蟬蛙喉をしぼる声ひとしきり 岩木タエ子  
宰相の「靖国参拝」に揺れし日よ夕べ声すみ鯛の鳴く 山下 菊代  
童顔のまま征きて還らぬ学友のいま在さば八十五歳 中津 ツユ  
水源の菊池溪谷水ゆたかわれらの生命育みくるる 氏岡 百枝  
久々の友との話弾みつつ茶菓も出さずには過ぎゆく 宮本サチ子  
蟬の声聞きつつ抱かれし幼な日の想ひもとほき母逝きし夏 河津 豊子  
夫逝きて破れたる心縫ひ合はせ狼火揚ぐがに八十路踏みしむ 中川 愛子



万句の里俳句会 8月句会

新涼が馳走と言ふも山の寺 高木 陽子  
吾が植ゑし思考錯誤のトマト熟る 鋤本 トミ  
踏み入りて雪加にひかれるる原野 田中ひさ子  
在りし日の父母を語りて盆の月 東 鈴子  
言葉にも勝る笑顔や日焼けの子 稲田 羚子  
新涼や墨の香しんとたちてきし 梅田 昭子  
雪の峰負けん気強きものばかり 光本とよいち  
遠き日の母の声する百日紅 小山 照子  
窓に這ふ守宮のしぐさ見てをりぬ 田中 美智  
新盆を修し安堵と虚無感と 吉井 綾子  
ソプラノの声の涼しきコンサート 北村 君子  
一山を揺るがす如く蟬しぐれ 丸山美代子

肥後狂句桜会 例会入選句集より

内助の功まとめ上げとる婦人票 小川 繁美  
本領發揮 ギネスブックに名の載った 須藤 新生  
内助の功ドラが更正した涙 狩野 本六  
意地つ張り熊本じゃモッコスて言う 高倉 新米  
本領發揮 ちよつと鉋で直さした 荒木 玄海  
勝手なもん 波乱おこさせ知らん顔 中山 晶子  
本領發揮 体育だった参観日 太田 雄三  
内助の功ケケチて言われて貯めとった 田中 孝幸

泗水短歌会 8月詠草

勝手なもん 聞く耳は持つとらっさん 光堀 善教  
意地つ張り 早よ診せときやア死なだった 窪田 明德  
勝手なもん ねたる時だけお母さん 藤野 清子  
勝手なもん 増えるペットのホームレス 東 栄次  
旅先で桜絵付けて造りたる湯のみを夫の墓前に供う 吉安 永子  
牛舎前あきつ舞い舞う猫ねらい飛び上がれども行為はかなし 内田つね代  
鮮らしき女郎花のひと叢れよく見れば小花に蜂らはしごしてゐる 大島 きと  
八月の陽に照らされて百日紅高きに花のキラキラ光る 宮本 峯子  
ほろ苦き香り降りくる朝の庭棚のゴーヤの花端々し 高藤タツノ  
一輪の花も咲かざり紫陽花の繁り立つ枝バツサリと切る 中山 定子  
わが手より細くなりたる夫の手をさすれば少し肉に触れたり 長尾はるみ  
夏陽降るあの日あの刻ふる里のラジオは告げし 八二五 福原美智子  
八月十五日終戦記念日夫戦死の従妹八十九歳一生を思う 藤本のり子

せせらぎ俳句会 8月例会

玉音に耳寄せ合ひし終戦日 坂本まつえ  
気力まだ失くしてならぬ草を引く 五丁 義昭  
夕菅や阿蘇にかりし月細く 藤本 邦治  
終戦日六十一年前も暑かった 内村 泊虹  
忘れし風鈴吊して和む窓 内村 鈴子  
すいとんに遠き日惚ぶ終戦日 寺本 和子  
針の手を止めて祈りて原爆忌 服部 静子  
火花火や孫の浴衣の袖を持ち 藤本アツ子  
台風の外れし安堵の窓の雨 村山 数恵  
暑い中ミーンミーンと蟬の声 (中一) 渡辺 一史  
さつきまで晴れていたのに夕立が (中二) 渡辺 大寿

肥後狂句水笑会 8月例会

一人暮らし 親にはそぎゃん言うてある 美 由  
そらよかる 里に預ける夏休み 五 女  
昼も暇 シャッター通って言われとる 三 水  
そらよかる 温泉に行き昼寝さす 三 代  
そらよかる 寝て銭になる天下り 好 茶  
うっ座り 話し出したらきりん無ア 江 彩

困つとる ハゲが娘に目ばつけて 水 光  
昼も暇 愚痴言い出アた胃肝臓 英 坊

七城短歌会 8月詠草

丈高き孫に戸惑い浴衣着する手を腰のぼし肩にとどくも 池田カツ子  
孫ら寄せる終戦記念日の昼真近テレビに合わせ黙禱促す 佐々 重弘  
下取りとなるマイカー後はいつかたの車庫に休める恙無くあれ 水田紗陽子  
炎天に傘差しかけし芍薬が黄昏時を花明りする 緒方 寛子  
地下足袋を土間に脱ぎゐる腐れ瓜を畑で踏みたる感触去らず 高木 精  
梅雨晴間田中の道を一人行く畦より白鷺一羽飛び発つ 松岡ミチエ  
あかときの窓開くれば涼気覚ゆなり超なる異常の今年の盛夏 村上 幾雄  
花火終わりにこもれる煙り消えたれば現れ出づる月のひそけし 池田 禮子  
鳴く虫の声がわが足止めたり夕暮れ迫る野戻りの道 岩下ミツエ

旭志文芸俳句会 8月詠草

鬼百合の花粉に染まり墓参かな 水谷 ミネ  
カサプランカ納骨堂の供華に映ゆ 東 芳子  
鈴虫の小さき生命に茄子入る 中山 栄子  
蟬生る朝の網戸に宿借りて 中尾ヨシコ  
孫育つ雷祖父は戦中派 芹川 蓉子  
夕立の兆しや夜明けに雲焼けて 出田みとり  
稲株に田螺真赤な卵つけ 郷 ミヤ子  
庭干しの梅の香ほんのり漂へり 東 由香  
つれづれに深夜便きく熱帯夜 芹川のり子